

シリーズ  
かほく  
市の文化財 No.29

有形文化財 編 力石（盤持石）

今回は市内に残る力石（盤持石）について、紹介します。

一般的には、江戸時代から明治あたりに日本各地で、大きな石を持ち上げるという力試しを行っており、現在も一部の地域では伝統として続いています。これらの大きな石は、力石または盤持石といい、表面の滑らかな楕円形の形をしたものが多いといわれています。

かほく市内をみると、現在でも指江では石では無く米俵を掲げる伝統がみられ、石としては瀬戸管原神社など神社や寺に奉納されているものや、境内の片隅にそととまとめて置かれているものがあります。高松町史を開くと、かつての青少年の娯楽は相撲であり、寺や神社の境内でよく行われていたそうで、これに合わせて、バンモチ（力石、盤持石を持ち上げること）

も行われていたとあります。このバンモチには、持ち上げる石の重さに階級があり、四斗盤（60kg）、五斗盤（75kg）と様々で、大きい物で一石二斗盤（180kg）のものもあつたそうです。そして、これらの内、四斗盤（60kg）、五斗盤（75kg）を持ち上げられることが、若衆入りの資格であり、持ち上げると祝杯を挙げたそうです。

市内にも多くの相撲ファンがいらつしやると思えます。相撲と関わりがあるバンモチにも思いを巡らしてみませんか？



盤持石の大きさ

※大人が抱えてようやく持てる位の大きさであることが伺えます。



中沼の八幡神社にある盤持石